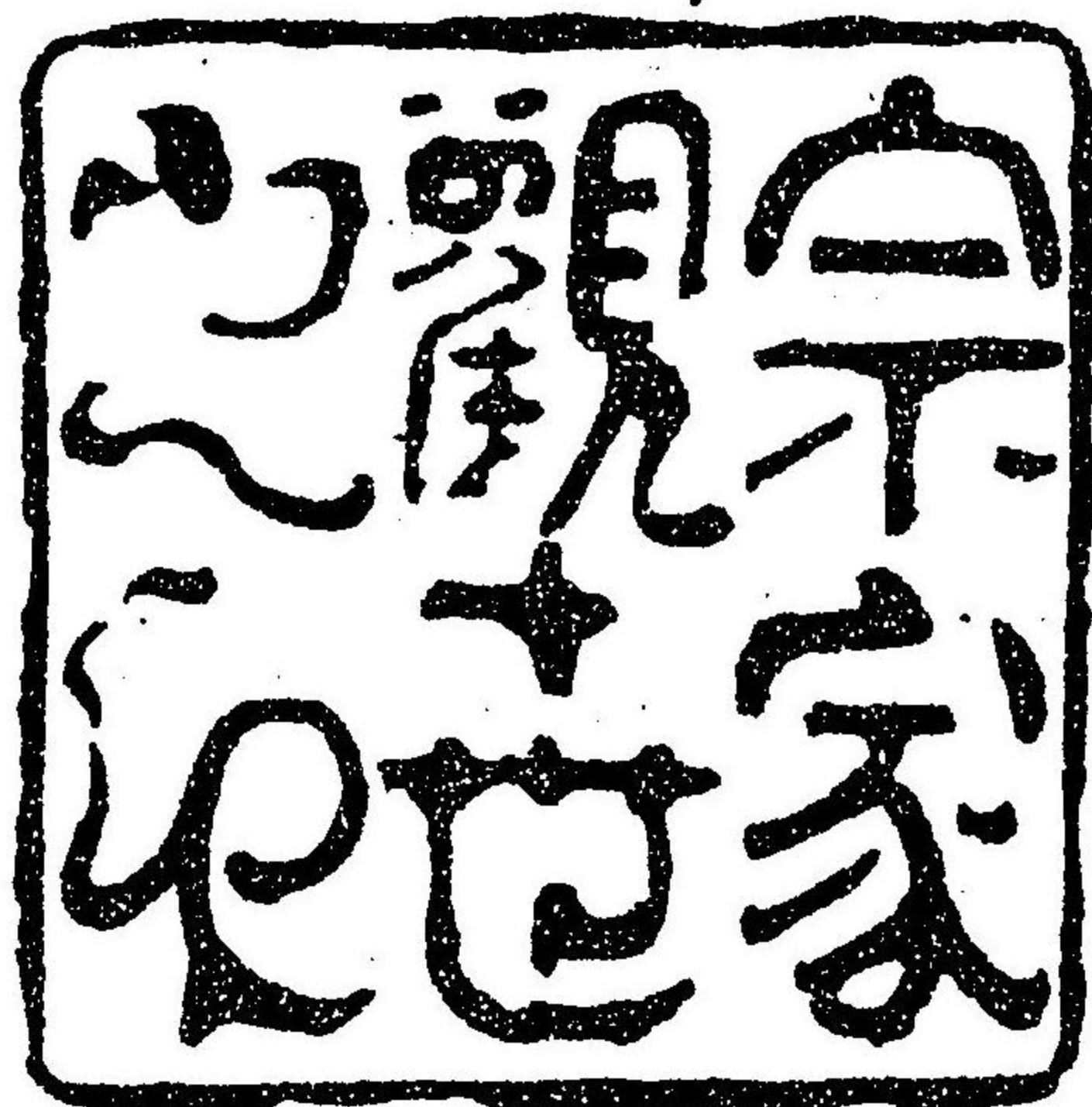
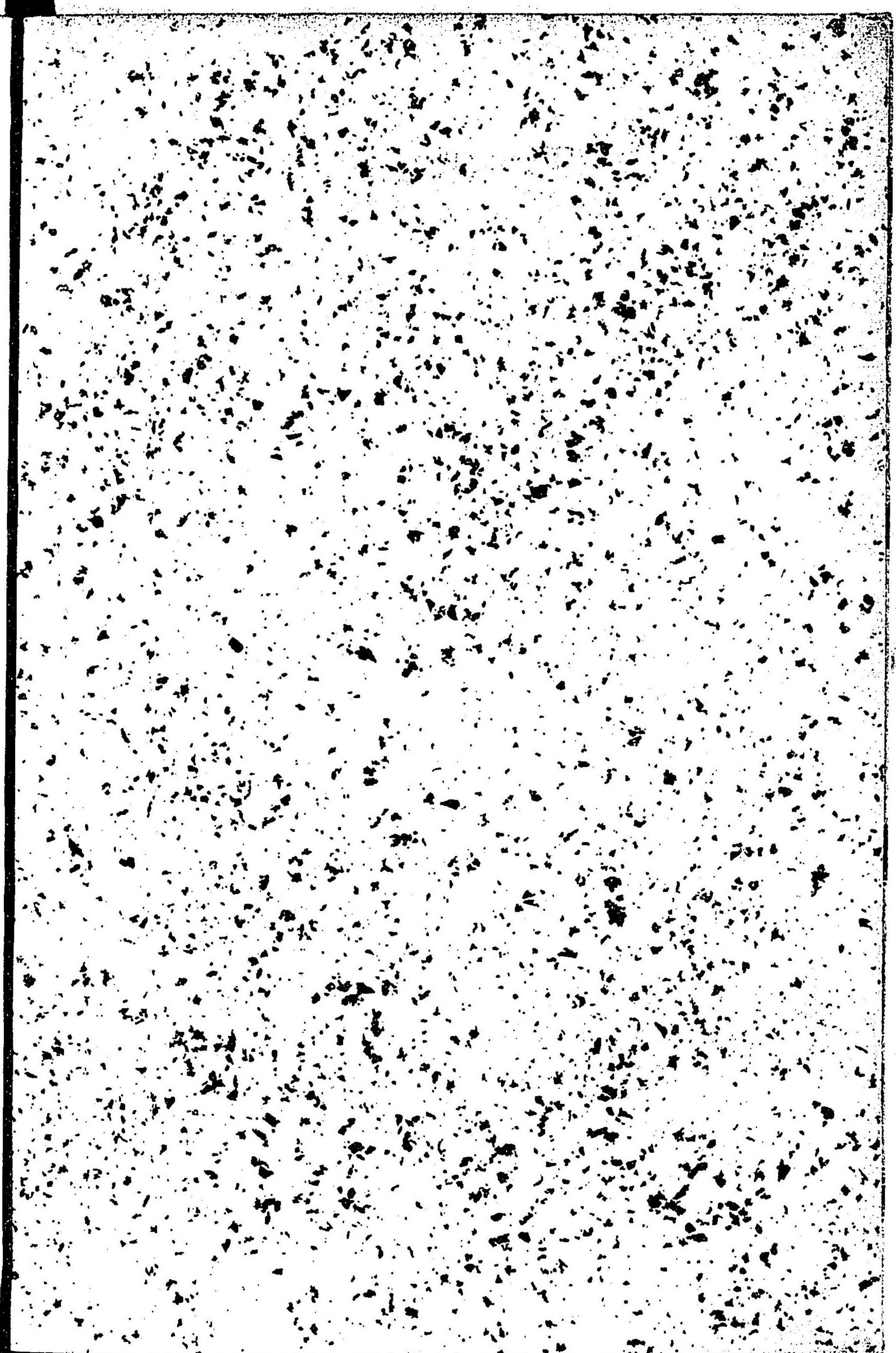


246
11
183

向樂天
寶盛
楊貴妃
玉萬
蘇



明治
43. 8. 1
陶英



季子知 賜能

白樂天

前_テ漢_ノ翁_ト住吉明神
ワキレ 白樂天

十月 二番目

實盛

前_テ老_ノ翁_ト實盛
ワキ 後僧

八月 三番目

楊貴妃

シテ 楊貴妃
ワキ 勅使

九月 四番目

玉葛

前_テ里_ノ女_ト玉葛内侍
ワキ 僧

八月 五番目

融

前_テ老_ノ翁_ト融大尼
ワキ 僧

白樂天

早カ_ル半開_ク 松_ノ身_ノハ 唐_ノノ 名_ヲ乃_リ 實_ニ寄_ル 白樂_天

天_ノノ 神_ノ事_也 扱_モ是_ノより 東_ノ

當_ノノ 國_ノあり 名_ヲを 日本_ノと 名_ツ

を 急_ニ放_ス去_ル 乃_リ 日本_ノノ 智_恵を

乃_リ 之_ノノ 宣_旨は 伊_呂波_呂今_ノ 海_路ニ

類_作 舟_漕出_ル 日_々 之_ノノ

其方乃國と事ん東海の海路
ちるは行舟乃く。後入日の影
跡の雲の旗手乃天津の月まの
ゆる其方よりよみえうめく程も
あ日本之地も事なまりく
海路と入て事作程の早かや日
本之地も事なまりく

日本のおうを詠めざるとな作
志らぬひ乃筑紫の海の組ほらま
月乃を跡の氣色う那 巨水漫
とて碧浪天をひて都の聲き
もんまいが扁舟は楫をうのまある
出湖の煙乃浪の上かくやとおひあら
れりる雲面白の海名あ 松浦の

西の山あり有明の月ウチヤの入雲も
 浮きや豊津オホキサ舟フネのたぐひはあ
 き渡り海分ウミの如唐土カラの船路フネミチ乃
 採も幸トクからて一夜イチヤ泊りと聞キから
 月も程ほどあふる跡アトの如ごとくコトにニあり
 萬里マンリの波濤ハタウを志シのまゝ日本ニッポン乃者ノモノ地チ又
 そつまゝ是ココは小舟コボネ一艘イツボネ浮ウつりて

漁翁ギョウオウ也シテはあま成なり日本ニッポン乃者ノモノ者モノら
 けしんシテは自ニ本ホニの漁翁ギョウオウなる者モノ也
 唐カラの白樂天ハクガクテンの詩シをよみて
 樂天ハクガクテンと云ふ人の名をよみて
 其の漢カンの人名ナをよみて
 て日本ニッポンの人名ナをよみて

たると其の事聞ゆるをうたてしむ
うてをたてしむあはれを思ふて
日本ニッポンの智慧チカラをうたてしむて樂天ラクテンあり
びくべもとの事あるあまの目メの事
よ西ニと謀めて沖ナミの方カタより旅ツするもの
まづ人毎ヒトノミにたてしむてしむ
きよめ今イマもかくと松浦マツウラ舟フネく

伊イの事あるてあはれ唐カラ土ツチ船フネのから
人ヒトの事あるてあはれ唐カラ土ツチ船フネのから
てまはるるもあはれ唐カラ人ヒトあはれ
は言葉コトバをたてしむてもあはれ唐カラ土ツチ船フネの
よ釣ツリ棹ササの暇ヒマをたてしむてしむ
わの事あるてあはれ唐カラ人ヒトあはれ
あはれ漁翁イサノヲリ舟フネの事あるてあはれ唐カラ土ツチ船フネのから

歌モテアツづシテ 叔唐タウド去シテの行シテを歌シテひ給
作早ぞ 唐タウの詩シを依シつク遊ナクサぶ又
日本ホニの文シテを慰ナクサむ
引早毛シテ多シテしシテきシテらシテよシテ 天テ竺シテのシテ文シテ
文モシを唐タウ去ドの詩シ賦シとシテ 唐タウ去ドの詩シ賦シを
まシテつク我ワガ朝テウ乃シテ多シテしシテきシテらシテよシテ 三サ國シを
やシテらシテむシテ舞シテひシテまシテりシテたシテめシテらシテいシテくシテ

かく大和ヤマト乎シテいシテちシテあシテまシテりシテあシテまシテれ
て早くシテ書シテ寫シテすシテるシテをシテたシテめシテらシテいシテくシテ
い早ちシテ其シテ儀シテあシテるシテあシテらシテはシテらシテるシテ目モク前ゼン
の氣シテをシテたシテめシテらシテいシテくシテあシテまシテりシテあシテまシテれ
昔タイをシテたシテめシテらシテいシテくシテあシテまシテりシテあシテまシテれ
白ハク雲ウンをシテたシテめシテらシテいシテくシテあシテまシテりシテあシテまシテれ
しシテるシテかシテ漁シテ翁シテ 昔タイをシテたシテめシテらシテいシテくシテあシテまシテりシテあシテまシテれ

あつらへし海乃濱のまゆ乃おほくま
さしふるお行もささよの女あり
吉幸地
うらや和國の風俗のく心あまる海
土人のる有極ま習ひのれ 申和
國のもて遊び和歌をえりて舞
歌の曲具をを顯しん ぞまや
がく乃遊びとをまかくる御ありん

誰ちくさくはあはれおれはあ
静 ば此舞樂の 日 鼓乃浪の音笛の龍
乃吟もむき 舞人ハけ舞が老の
あまらよまたつ 舞海又浮びつる海
青樂をまのべ 舞合 舞乃舞 國も
動り萬代 舞 山陰のつらら
水のまの海 地 復乃はるの海

けしきして唐の愛より漢より端
 とききつる愛も終や神とききつる愛も
 かる神と君が代ノのうごりぬ國ノを
 ひきまノ

實感

夫西方の十萬億を遠くはる道
 参らる愛も己身乃強位の國貴
 賤群集れ称名の聲目と徳と
 乃法の場 愛もまことと探る不
 捨念 ちるひと探る 探るま
 獨りあほ佛乃法を尋ねるま

引れ平家乃侍ら多てのる尋

軍物語の筆書はたはるの業

油球の筆書はたはるの業

油球の筆書はたはるの業

油球の筆書はたはるの業

油球の筆書はたはるの業

油球の筆書はたはるの業

油球の筆書はたはるの業

油球の筆書はたはるの業

油球の筆書はたはるの業

油球の筆書はたはるの業

油球の筆書はたはるの業

油球の筆書はたはるの業

油球の筆書はたはるの業

油球の筆書はたはるの業

油球の筆書はたはるの業

油球

油球

至らざるまじく 友を念はば
恥滅せし量罪則ち向ふを
跡もなきあられ 時をくはるひ
籟を流るるまじく 悔の語
を昔を忘るはて 思ふはゆる
乃草の陰野乃露とまゑ 有様
語りやう 悔も 隆系乃合戦破

新らば海乃方は手塚の大島え感
オ曾殿のは前よはあてや 隆系感社
多し異乃曲者と想ぐ首とくは
大得くはみまがらぐ 勢もあはれ
思へ錦乃直筆をきく ちのまじく
責れは終よあはれ 聲の坂東ごゑ
みくはるやオ曾殿天晴長井の母

故あ當る感^{ツル}之^ニ也^ハ有^ル後^ハ怨^ハら^ズ鬢^ハ
 鬚^{ヒゲ}の白^ク髪^ハたる^ハま^づ黒^クそ^レ不^レ審^ルあ^れ
 樋^ヒ口^{グチ}の^ハ高^クり^見た^るこ^して^ハか^ら
 め^ぎ樋^ヒ口^{グチ}ま^あり^目み^く淺^クら^ら
 を^らと^あら^して^ハあ^まな^きや^あま^敷
 別^ニ黄^クく^作ま^しる^ハ感^ハ中^ニは
 申^シへ^六十^ニ餘^テ軍^ヲま^はら^はる^殿

願^ハあ^らま^して^ハあ^まな^きや^あま^敷
 あ^まな^きや^あま^敷者^ヲと^して^ハあ^ま
 つ^らま^んの^借ら^る一^鬢も^も書^ハ
 よ^うあ^らま^して^ハあ^まな^きや^あま^敷
 中^ニ恨^ミら^ず誠^ニに^洗は^らせ^て
 法^師公^ノ入^心を^もあ^らま^して^ハあ^ま
 出^立前^ニあ^らま^して^ハあ^まな^きや^あま^敷

岸は際を氷のみぎり毛陰うる柳
乃急の枝つれて 氣を吐き
新柳の鬚を梳り氷清ての波奮
蒼乃ひきをあらひてこれ雲流
まねちく奪乃白髪と吹きり
さかを惜母らるる銀毛かくこそ
さへまればあらやけやごと皆感

涙をう流しきる又々感錦
の直垂せしむる私あらぬ感あり
る々感都を出し肉々感よりス様古
郷への錦をまきて縁とらるる奪交
ありる々感は國忠都前乃者あく作
此がを年歩領つまられて
は長井よ居住たり作まは度水國よ

お下りてはゆりてはて討死はるべし
巻厚の思おはえはるは海をわきと
らまゝは赤地の錦乃直登せし
たゞはるの思はるは烈まは吉予ふも毛
みぢきまをわきつゆまは錦まて家又
歸る人やまはる心と續くも此奉
文の心ありはるまはる古も朱買屋の

錦乃衣をよむ誓山は翻るうの衣
威の名を水國の岐はあげかたはる
まゝはるは名は集代は名明の月の
よはるは懺悔お語はるは上もキ地
懺悔の物語はるは氷の底まはるは湯
を流しはるはあはるは期執はるは修屋
乃道はるはるはるはるはるはるはるはる

まはしたくも手塚めは陽ら
志愛の雲入るありつら兵隊と
おのる中も先を望手塚乃太弟
先感、願おの金を付きと
陽らりて多感と押あらべて組隊を
あつれものきき日本一乃剛の者
と軍隊をよとして鞍乃前隊は押

付く首のまつと松ききり
あつれ手塚の太弟多感らり手はま
りりて多感とあつと揚て二刀き
隊をよと組く二刀があつは
と落きるが老武者の悲しき
軍はあつれらり風はあつある枯木
の力をなれ手塚のきつあつある感

をひたす。楊家の娘。いふ。あつ
く。其名。楊貴妃。と。あつ。あつ。あつ。
あつ。細。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。

あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。
あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。

あつ

あつ

あづまの月影もぬまのほある孩
のあから意せしあ人もあ 唐の
天子乃勅の使がまき給ふなり
玉姫のうちましましり 女 何唐
帝乃使となししあまのまね
うと九花の根を押しまき給ふ
簾のちまきし 女 何唐

雲のひびり 早 花のうほをまき給ふ
ちくたるは眼のうちまき給ふ
粉給へま 上 梨花一枝をまき
たるようほひのくまき給ふ
夢のくれあ井未央の柳乃みり
も是のうら増えまき給ふ
乃粉代の顔色乃あまき給ふ

校とがらむと揺るひ事をもひう
かへ侍入ふやけあごあれたとまれ
うむる浪うれし上赤白はまらる夢中
衣づく流物も舞のあらひきて其
牙の馬鬼は留まりたまひの仙宮は
星のつばねも友をとりひ獨翅をか
やまの連理も枝朽てたもまらさ

を愛ました同じのゆく魚あらむ
終乃あまを頼むと語り終へや
けらなごらひて出舟乃伴ひたぬる
はと思つらうまはれぬいふあらん
そのころうやれまの行中へまへ
乃常あぐりありはまらぬやまへ
しはらがまらまらかめやれらま

七

夜遊

中ナカのナカおオきキ起キとトもモ我ワもモそのソかカらラもモ
上ウ界カイ乃ノ諸シヨ仙センたタるルがガはハ昔シヨクのノちチれレもモ何ナニ
もモしてシテかカりリ又マタ人ヒト界カイはハまマしシまマてテ楊ヤウ家カのノ
深シ意イをヲ養ヤウりリれレいイまマもモあアるル人ヒトあアるルもモ一イチ
君キミ聞キれレつツいイうウがガいイまマあアりリ后コウ宮ミヤ乃ノ
定テイめメたタ起キ給キタひヒ借カ老ロウ同ドウ穴アナ乃ノかカらラひヒ
毛モウ縁エンつツまマあアまマいイたタぶブらラアア又マタ此コノ邊ヘ

あアらラまマあアらラりリ海ウミのノ身ミをヲまマまマとト味アジをヲ
あアまマれレまマらラれレまマらラ乃ノ露ツキのノたタまマはハらラうウ
あアひヒたタらラりリ終ハシりリ結ムスぶブうウまマらラうウ
上ウ女メのノあアまマもモあアらラまマいイまマもモ恨ウラみミあアるルもモあアらラまマ
月ツキのノ七ナナ日ニチ乃ノ我ワ君キミとトかカらラまマらラうウ
乃ノはハ穢ケガレまマらラぬヌのノ言コトのノ穢ケガレもモあアまマらラうウ
あアらラまマあアらラまマのノ縁ヰ乃ノあアらラまマのノ縁ヰ

楊貴

九

だるまの珠の思ふあらひあるまじき
 や子月あれて程の世帯の世帯
 ぬるれ乃あつりせざる世帯人より
 ひてまよふそれともものづからえ
 ぬる者定歌とまじき時きあふ
 ころおれありきれ羽衣の曲
 うらのまよふまれあつるうらひ

下女
 女子かお上
 けらひき首の物語の盡さる月
 日もうつりまひのきるせか
 又おのて暇中てきらびさして執使の
 おこよぬのきれたるきよても
 又の世帯あひらき事も帯が鳴つ
 どり世帯あひらき事も帯が鳴つ

三輪の枝山本もきる程もあぐりま
河も流るよまきくもるもあぐりま
我れはあぐりまあぐりまあぐりま
あぐりまあぐりまあぐりまあぐりま
初瀬川のぼるねたるきりまのれ
舟人もあぐりまあぐりまあぐりま
あぐりまあぐりまあぐりまあぐりま

あぐりまあぐりまあぐりまあぐりま
あぐりまあぐりまあぐりまあぐりま
あぐりまあぐりまあぐりまあぐりま
あぐりまあぐりまあぐりまあぐりま
あぐりまあぐりまあぐりまあぐりま
あぐりまあぐりまあぐりまあぐりま
あぐりまあぐりまあぐりまあぐりま
あぐりまあぐりまあぐりまあぐりま
あぐりまあぐりまあぐりまあぐりま
あぐりまあぐりまあぐりまあぐりま

うらも雲の白影の白ふきり一ほの
ちうあまの影の白くけけけけ物のかめ
とく類のあや面白の音のえて星
つきの奥のあや谷のさしつられり
絶りの霧のあや影の夕のたれ
かへは澄の深のつらくあぶるく
まもまろあやる四方のあやあもあ

あも紅のあやのあやのあやの
枚のあやのあやのあやの
すあやのあやのあやのあやの
二枚乃枚のあやのあやのあやの
枚のあやのあやのあやのあやの
あやのあやのあやのあやのあやの
あやのあやのあやのあやのあやの
あやのあやのあやのあやのあやの

あや

あや

おののちの内に家世をしまつて後で暇を
おぼへていひ見せしむる後一尋あり
昔のあまをたし思召して法跡を能吊らひ
繪日入 クリ地 空も有 スル 世を知らぬ白乃
病の身乃 ス 跡の中 サ 行く
あ ト 形身も ト あり サ あり ト あり ト あり
思の ト 玉草 ト あり ト あり ト あり ト あり

おののちの内に家世をしまつて後で暇を
おぼへていひ見せしむる後一尋あり
昔のあまをたし思召して法跡を能吊らひ
繪日入 クリ地 空も有 スル 世を知らぬ白乃
病の身乃 ス 跡の中 サ 行く
あ ト 形身も ト あり サ あり ト あり ト あり
思の ト 玉草 ト あり ト あり ト あり ト あり

仁よまゝにわらふる義なり整 兼ヤあをれ昔
思ひわらふ女物敷く早くも知や浅
かたぬ地 縁地ひらねく女引後さく
頼日コラニ母ニさうニ法ノ人ノ吊ヒ鈴ノ入レれ
こその後の露乃玉のなと名乗も
やらげ滅ハなハきハうハくハ 挿中きハおハ昔ノの
内ナ依レりハのハ顯カまハひハまハきハるハがハたハとハひ

業ユ因レにハまハくハたハ 照ヒさハばハらハめハやハ日ノ若ク
光ヒりハくハ大ハ急ハ大ハ悲ハのハちハらハひハあるハ法ノ
燈トあハらハらハいハのハまハひハばハおハおハらハ
のハあハくハ 徳ハわハるハあハらハうハたハあらハて
玉ハ昔ハ昔ハあハるハ成ハまハちハをハまハまハぬハらハん
あハくハもハ法ノ教ノしハ降ハしハたハのハ下ハらハらハ
一ハあハのハ甘ハまハあハらハでハおハらハらハらハなハるハ

塩引長社さむら浦わの杖乃久少
あゆの里あむの射及む方洋あつら
くろ^{ムシロ}あむの射及む方洋あつら
まむあむの海きしあむの海あむの
誤りたるが射殿 あり行はなむ
爰をさくらんくともさくらんく
此^甲ありさくらんく條に長院と社あむの

行^{ニテ}長院と社あむの浦乃久少
奥のつらあむの海きしあむの海あむの
れたる海あむの海あむの海あむの
乃あむの海あむの海あむの海あむの
あむの海あむの海あむの海あむの
あむの海あむの海あむの海あむの
都の平乃移されたるが海あむの海

あまのあまの離が鳴らう けいけいあはれ社
籠が鳴らう 離が鳴らう 常き法中まよ
せらけけい酒宴の時茶椀の成り可
すかや月結くく 愛の月乃出
くあやのなるまづら鳴の森の梢の鳥
乃常の鳥のなるまづら鳴の森の梢の鳥
一かきうの離のなるまづら鳴の森の梢の鳥
毎

何と云ふは西前の鳴らう けいけいあはれ社
よまらまらなるまづら鳴の森の梢の鳥
鳥の宿の池の中 樹僧のなるまづら鳴の森の梢の鳥
乃門のなるまづら鳴の森の梢の鳥
乃門のなるまづら鳴の森の梢の鳥
乃門のなるまづら鳴の森の梢の鳥
乃門のなるまづら鳴の森の梢の鳥
乃門のなるまづら鳴の森の梢の鳥
乃門のなるまづら鳴の森の梢の鳥

離の海から物い友我も度り昔乃
跡を陸奥乃ちちの浦わび涙めんやち
かろうらわをあらあし塩うぬる浦を
都の中へうつされたる謂おぼろしく
暖淋乃天島は古宮の巖を居あちの
乃ちちの塩うぬる眺らふみんあらせ
みび光あし塩うぬるうらうら乃程

波のこつ浦のつも日毎に潮をぬき
愛をへ塩うぬるうらうら乃便
とぬる塩うぬる相續して歌ふ
人もあつた浦のつも干塩を
成る油鳥のつも塩うぬる氷の雨
乃あつたのつも塩うぬる松
陰の月だつたのつも秋の音のつも

歌

五

塩をぬんとて持ち田子乃浦あづまらら
ぎの塩衣くめば月をも神もち塩の
けは歸る後乃よしのの巻人とらつら
塩雲のかけ物きて跡もしらび成きり
衣をもみきぐ碑もきり史破托若乃衣
をかてきそぐ。岩根の床よおそま
から物も亭物をみるやとて夢侍身の

猿寝らあぐなむくわく年をへしあを
又み入ぬる浪のう塩衣の浦人
乃こよひの月を陸奥乃ちる浦物も
驚い申すはかきもあはれ大屋とら
我のあしめ我塩衣の浦よあまのの
まづらひの鳩の松陰の月自はあを深入
月宮殿乃白衣の袖も三五夜中れ新

の樹は宿り^{シテト}魚は^カ下は波は^サ水
の^地も^地あり^キ秋乃^{シテ}おる^サ鳥も^{シテ}あり^サ
鏡も^{シテ}あり^サ月も^{シテ}あり^サ影も^{シテ}あり^サ
明方^{シテ}の^{シテ}雲を^{シテ}成^{シテ}る^{シテ}ある^{シテ}此^{シテ}も^{シテ}陰^{シテ}は^{シテ}あり^サ
つれ^{シテ}月の^{シテ}都^{シテ}は^{シテ}入^{シテ}給^{シテ}す^{シテ}う^{シテ}わ^{シテ}ひ^{シテ}あり^サ
る^{シテ}影^{シテ}の^{シテ}影^{シテ}を^{シテ}あり^サつ^{シテ}る^{シテ}影^{シテ}乃^{シテ}面^{シテ}影^{シテ}

246
183

明治參拾貳年六月廿五日從
同 參拾四年一月廿八日迄
同 四拾參年七月二十五日 再版御届
出版御届濟

復製不許

訂正者 觀世清



發行兼
印刷者
檜 常 之



印刷所
江 川 堂
京都市上京区二條通麩屋町角
東京市四谷區傳馬町貳丁目

